

## 大学生の友人関係—「心の友」と「気の合う仲間」—

伊 賀 光 屋

### I 友人関係の類型とパーソナリティ類型

#### (1) ライフコースと性差

社会構造的視点からの友人関係の諸研究の中で繰り返し取り上げられたテーマは、ライフコースの段階ごとで、また男女間で、友人の意味や重要性が異なっているということだ。まず、ライフコースについてみると、次のようになる。

人生の初期には子供はもっぱら家族の範囲内で活動しており、成長とともに子供が関係する領域は広がっていくものの、未だに家族と強い情緒的紐帯や依存によって結びついている。幼児期および児童前期（前操作的段階）の友人関係の特徴は自己中心的であるということだ。H.S.Sullivan (1953)によれば、2～5歳の子どもは大人の介入なしに仲間関係を維持できず、たまたまそばにいた相手と遊び、大人の支援から独立して一緒に遊ぶ友人が出来るのは4～8歳頃だという。しかしこの段階ではまだ自己中心的で自分のニーズを満たしてくれない相手との関係は持続しないという。児童中期（具体的操作段階）に入ると親密性や相補性が現れ友人の考え方や感情を理解出来るようになる。また仲間を形成し、集団規範を生みだし、クリーク内での親交や支援がみられるようになる。

そして本格的な友人関係が形成されるのは思春期である。思春期に入ると友人のニーズ、感情、態度や信念に対する感受性が高まり、忠誠の表現や自己暴露が始まる。これは思春期の最大の関心事が自己理解であり、友人を自己の比較準拠点として用いるようになるからだ (J.Gottman & G.Mettetal, 1986)。また、友人が自己と異なる行動、態度、価値観を持つことを容認できるようになり、ギャング・エージを脱却する。こうして、問題を共有し人格的に支援しあう、親密で分かち合う友人が作られる (R.L.Selman, 1976)。そのために、思春期以降は家族との紐帯は卓越性を失い、非親族とくに同齡の仲間 (age-mates) との紐帯が次第に重要になっていく。青年や若い成人期には、教育、キャリア、そして配偶者選択といった非家族的な営みに没頭していて、そのために類似した関心をもつ同輩の人々より多くの関わりをもつのだ。

しかし、これらの人々が結婚し、とくに親になった時には、再び親族との関わりが重要になってくる。また、小さな子どものいる親たちの間では近隣との関わりが最も多くなり (Gans, 1967; Keller, 1968)、既婚の成人はあまり多くの新しい友人関係を発達させない (Babchuk & Bates, 1963)。

ところが、配偶者と死別した後には、特に子どもとの世代間連帯 (V.L.Bengtson & R.E.L.Roberts, 1991) の弱い老人の場合には、再びソーシャル・サポートの重要な提供者として友人の役割が大きくなる (G.C.Wenger, 1989, 1995; S.Mugford & H.Kendig, 1986)。

このように、N.Shulman (1975) が指摘する通り、友人関係の卓越性は思春期から結婚前の成人期までに最も強くなる。この時期にはほぼ同年齢の友人や恋人が最も重要な他者となり、アイデンティティ確立や親密な関係の確立といった発達課題を達成しなければならないといえる。

「青年たちは両親への情緒的依存を断ち切らねば自分を大人として感じることは出来ない。青年は自

分の重要な関係や愛着を確立することを学ばなければならない。そこで、青年期の友人関係は、それが最初に自立的に選んだ深い愛着であるが故に重要なのである。」(S.Kon & V.A.Losenkov, 1978: pp149)

また、性差についてはC.S.Fischer & S.J.Oliker (1983)は18歳以上の成人を対象とした調査から、対象者全体では男女とも付き合いのある人 (associates) として名前を挙げた人の数はほぼ同じ (男18.6人, 女18.4人) であるが、ライフコース上の生活段階を考慮すると、若い有配偶者では男の方が女より多く (男22.4人, 女20.4人)、空巣期や老齢期では女の方が男より多くなる (男18.4人, 女20.4人) ことを指摘している。女性が若い有配偶の時期に友人を減らすのは、単に自らが労働力から引退するためだけではなく、夫の友人を歓待するための家事労働を増やさざるを得ないために、自らの友人関係を形成・維持する機会が減少するからだと考えられている。一方、空巣期以降は、女性にとって自分の友人関係の形成・維持に対する制約となっていた親としての役割は子の去家により全面的に、また妻としての役割は夫の退職によって部分的に消滅するので、女性は自分の友人関係を形成・維持しやすくなるためだと考えられている。

青年期の友人関係の性差については、ソビエトの14~20歳の青年を調査したS.Kon & V.A.Losenkov (1978)により次のような点が明らかにされている。

- ① 女子では「真の友人」は減多に得られないと考えており、男子では年齢の上昇とともに「真の友人」は得難いとする者が増加するという。
- ② 「友 (drug) と仲間 (priyatel) はどこが違うのか」という文章完成問題に対して、最も強調された回答は、親密さ (intimacy) と内緒事を打ち明けられる関係 (confidentiality) であった。
- ③ また「友とはどういう人ですか?」という文章完成問題では、相互援助と忠誠、および共感的理解に多くの回答者が言及し、特に女子は共感的理解を強調した。
- ④ そして「ある人を理解するとはどういうことですか?」という文章完成問題に対する回答で、男子は「その人をよく知る」(人物理解)や「共通の関心を持つ」(知的類似性)という回答が多かったのに対して、女子では「その人がしていることを体験し、感じる」といった共感と共通体験に当てはまる回答が多かった。
- ⑤ 年齢が高まるに連れて、友を仲間から区別するようになる。
- ⑥ 両親、きょうだい、教師、友人などの親しい人の中で、誰に最も良く理解されていると思いますかと聞くと、すべての年齢で親友 (同性の同輩の) が最も評点が高く、ついで母親であり、父親や教師に対する評点は低かった。

## (2) 「心の友」と「遊び友達」

友人関係 (friendship) の研究は社会心理学、公衆衛生学、そして社会学でさかんに行われているが、「友人」(friend) の語の意味を当たり前のものとして、あやふやなまま用いている。

友人の語の曖昧さはその日常的使用においてもみられ、例えば、OEDの友人の定義は、

- ① 相互の好意や親しみによって相手と結びついている人。(普通は愛人や親族は除く)
- ② 様々な仕方で漠然と用いられている。例えば単なる知り合いをそう呼んだり、あるいは厚情や腰の低い親切さを示すために用いる。
- ③ 親族や近い関係の人。
- ④ 愛人や情人。(いずれの性の場合にも)

となっていて、相互の語用的意味は矛盾している。また、文化ごとに、友達の意味は様々で、フランスでは copain と ami の二つの意味があり、イギリスでも mate と friend の二つに意味がある。しかし、アメリカではいずれの場合にも friend を用いられる。そこで、S.Kurth (1970) は、ある人が職場の同僚や近所の人々と「友好的関係」(friendly relations) にあるとしても、この紐帯が職場や近隣を超えて様々な領域に拡張されなければ、彼らは友達 (friend) にはなれないとして、友好的関係と友人とを区別した。

こうした「友達」の曖昧な意味に対して、C.S.Fischer (1982) は、人々が実際に「友達」をどのような関係にある人に対して使っているのかを調べるためのサーベイを企画した。

母集団からサンプリングする際の諸制約から、調査対象者はサンフランシスコと湾岸地域を含むカリフォルニア北部の都市部に住む英語を話す主として白人の成人1,050人であった。

質問紙の質問項目は対象者の社会的ネットワークにいる個々の氏名を聞き出すための質問群 (①~⑨)、回答者と名前が挙がった相手との関係を定めるための質問 (⑩)、相手の諸属性に関する質問群 (⑪~⑬)、結びつきの強度に関する質問群 (⑭~⑯) などからなっている。質問項目は次のようなものであった。

- ① 町の外に外出するとき、家の見回りを誰に頼みますか？
- ② 過去三ヶ月の間に、家回りの仕事で誰に手伝ってもらいましたか？
- ③ 仕事のやり方について話し合ったことがあるのは誰ですか？ (雇用者のみ)
- ④ 夕食を共にしたり、訪問したり、一緒に出かけるなどの付き合いのある相手は誰ですか？
- ⑤ 趣味について話し合うのは誰ですか？
- ⑥ 本気でデートしたり、婚約者と考えている人は誰ですか？ (未婚者のみ)
- ⑦ 個人的な心配事を誰に相談しましたか？
- ⑧ 重要な決定をするときに誰に助言を求めましたか？
- ⑨ かなりの額のお金を借りるとしたら誰に借りますか？

(以上の質問については、回答者に好きなだけ多くの人の名前を挙げてもらうが、実際にリストに記録するのは、質問④では最初の10人、質問⑤では最初の4人、質問⑥では最初の1人だけ、残りの質問では最初の8人だけである。そして、ここで名前の挙がった人の一覧表を作成し、コピー一部回答者に渡しそれを見ながら以下の質問を行う)

- ⑩ 大切な人で、このリストに挙がっていない人は他にいますか？  
(新しい名前が挙がったら、リストに加える)
- ⑪ リストに挙がった人々はあなたとどんな関係にある人ですか？順に答えて下さい。
  - イ) 親族 (どのような続柄か？)
  - ロ) 職場の同僚
  - ハ) 近所の人
  - ニ) 一緒に属している団体などのメンバー (どんな組織か？)
  - ホ) 友人
  - ヘ) 知人
  - ト) その他

次に、リストに挙がった人々について次の質問をする。

- ⑫ その人は男ですか女ですか？
- ⑬ このリストのなかで、あなたが特に、親しい (close) と感じるのは誰ですか？
- ⑭ 車で5分以内のところに住んでいるのは誰ですか？
- ⑮ 車で一時間以上かかるところに住んでいるのは誰ですか？
- ⑯ 同じ分野の仕事をしているのは誰ですか？

次に、①③④⑦⑧⑨の質問で最初から5人までに名前の挙がった人のみをサブサンプルとして、その人達について次の質問をした。

- ⑰ その人とどのようにして会いますか？
- ⑱ その人はどこに住んでいますか？
- ⑲ どのくらいの頻度で会いますか？
- ⑳ その人は何歳ですか？仕事は何ですか？結婚していますか？子どもはいますか？

これの質問に対する回答を次のような分析方法によって解析した。友人と呼ばれるか否かのダミー変数を基準変量 (従属変数) として、イ) 名前を引き出すために用いた質問群 (①~⑨)、ロ) 関係についての役割名称 (⑩)、ハ) 相手の個人的属性 (⑪~⑬)、ニ) 回答者の個人的属性、ホ) これらの合成変量、などの予測因子 (独立変数) から予測する回帰分析にかけた。同様に、「親しい人」か否かを基準変量とした回

婦分析も行った。

そして分析の結果、次のようなことが明らかにされた。

- ① 名前を引き出すための質問（①から⑨）では、最小2人最大65人の名前が挙げられ、平均は18.5人であった。
- ② 名前の挙げられた人すべてのうち、「友人」とされたのは59%の人である。
- ③ サブサンプルでは69%に人が友人とされた。
- ④ 「友人」と「親しい人」との相関は $r = -0.101$ で一致しない。
- ⑤ 名前を引き出すための質問項目（9変数）では相手が友人と呼ばれるか否かというダミー変数の分散の11%しか予測（説明）できない。
- ⑥ このサンプルの46%の関わりは名前を引き出すために用いた質問項目で示される以外の社会的交換をしている友人である。つまり、それだけ友人は無差別に使用されているといえる。
- ⑦ 友人を予測する最大の社会的関係内容は④付き合いをすると⑤趣味について話すことである。
- ⑧ 親しい人を弁別する予測因子のパターンは友人を弁別する予測因子のパターンとほぼ逆である。すなわち、親しい人とは個人的な心配事とについて相談し、重要な決定について助言を求め、まとまった額のお金を借り、あるいは恋愛関係にある人のことである。
- ⑨ 親族が友人と呼ばれる確率は大変低く、親しい人とされる確率は高い。
- ⑩ 相手や本人の属性はほとんど差を生まないが、老人は若者より若干「友人」の語を用いやすい。

先に述べたS.Kon & V.A.Losenkov (1978)の研究で明らかのように、青年は友である条件として親密さ忠誠そして共感的理解や信頼を重視していて関係が目的的であり、何らかの助けを得るとか一緒に何かをする手段的な関係の仲間と区別している。他方C.S.Fischer (1982)の研究で明らかのように、成人は親密さを親族に求め、友人には付き合いや趣味の共有を求める。いかえると成人の友人は友と言うよりは仲間であるといえる。

それではこれまでの他の諸研究のなかで、友人にはどのような類型があるとされてきたのだろうか。

C.I.Cohen & H.Rajkowski (1982)は友人関係の物質的成分（多重的な相互援助）と非物質的成分（親密さや主観的重要性）とはほとんど重複していない、いかえると援助し合う友人と親しい友人とは別の範疇をなしているという。そして、女性では特に親密な人、主観的に重要な人を友人と考えやすいという。また、友人関係の維持には近接性や持続的な接触は必要ないという。

R.B.Hays (1984,1985)は友人度（友人を「知り合い」、「ちょっとした友人」、「親友」、「一番の親友」のいずれに評価するのか）はともに従事する活動の数が多いほど、また付き合い、ソーシャル・サポート、自己暴露、情緒的表出の各活動領域での親密（表面的、ちょっとした、親しいの三つの選択肢のなかで親しい関係でともに行動したとする場合）度が高いほど、高くなることを明らかにしている。また、親友へと発展したダイアドはそうでないダイアドと比べてより多くの活動とともに従事していることを明らかにした。つまり、友人関係の維持発展に直接的接触は不可欠だということだ。

S.Rose & F.C.Serafica (1986)は表面的な友人関係はそれが報酬的であるために形成され維持され、より発展した友人関係は相互に相手の幸せに関心をもち、相手の独自でかけがえのない資質を賞賛することに基づいている自己維持的な関係であるとした。そして、友人関係の発展段階を特徴づける相互行為があると考えた。

知 人：方向付け（表面的で紋切り型の仕方であてつけし、相互行為する）

ちょっとした友人：打診的な情報交換（友好的でうち解けているが親密でない相互行為）

親しい友人：情報交換（親密さがさらに高まり、相互理解が進む）

一番の親友：安定的な相互行為（相互によく知っていて、相手の行動をたやすく予測できる。コミュニケーションはますます親密になる）

そして、次のことを明らかにしている。

- ① 若い成人たちは、インパーソナルな質問では「ちょっとした友人」「親しい友人」そして「一番の親友」で、それぞれを維持する戦略がはっきりと異なっており、ちょっとした友人から一番の親友へと向かうに連れて、近接性や行き来による接触が強調されなくなり、好意が重視されるようになる。

- ② しかし、実際の自分の友人関係について聞くと、親しい友人と一番の親友との間に維持のための基礎として好意を挙げる人の割合に差がない。また、実際の一番の親友の場合には自己維持的とは考えられず、手紙、電話、訪問などの行き来が維持のためには必要と考えられている。

以上のように、友人には親友と仲間が存在し、親友は親密さ、内面を打ち明けられるだけの信頼感、相互尊敬、共感的理解などを特徴としている。他方、友人は付き合い、共通の楽しみや活動、気安いうち解けた関係などを特徴としているといえよう、また親友はダイアド関係の特徴づけるタームであるのに対して、仲間は集団を意味している。本稿ではポスト青年期、あるいは成人への移行期の途上にある大学生を対象としてその友人関係の類型を考えるのであるが、上述の諸研究で親友として捉えられているものを「心の友」(confidant)と、仲間としてとらえられているものを「気の合う仲間」(matey)と呼んでおこう。

### (3) 友人関係のルール

社会的行動は規則によって縛られている、そして、こうした規則は、ある状況や関係において共通に追求されている目標を達成するための助けになっているという機能主義的立場にたつて、M. Argyle, & M. Henderson (1984) は友人関係の展開に果たす規則の役割についての理論を打ち立てた。

英米社会では夫婦関係や親子関係にはそれを確立し、維持するためのフォーマルな規則(例えば民法の婚姻や扶養、親権の規定)は存在するが、友人関係についてはそうしたフォーマルな規則は存在しない。しかし、それに代わるインフォーマルな規則が存在する。そうした友人関係のインフォーマルな規則に関して、オックスフォード大での社会関係一般における規則の研究に基づき、次の11の仮説を立てた。

- ① 友人関係を支えるインフォーマルな規則の集合が存在する。
- ② 友人は適切な水準の報酬(交友関係、情緒的・社会的支援、実際の援助など)を与え続ける。しかし、親族のように多大な援助(大金を与えたり、病人の看病を続けるなど)を与えることはない。
- ③ 第三者との関係で、嫉妬を避けるための規則がある。
- ④ 秘密を守り、プライバシーを尊重するための規則がある。
- ⑤ 文化が異なっても、友人関係に関するインフォーマルな規則は類似している。
- ⑥ 親友はサポートを与えてくれる点や、親密である点で、その他の友人と区別される。
- ⑦ 女性の場合は、男性の場合よりも、友人関係の規則が自己暴露や情緒的サポートを強調したものとなる。
- ⑧ 若者の場合、友人関係の規則は助け合いや一緒にいることを強調したものとなる。
- ⑨ 人は、友人関係の解消の理由を、相手が規則を破ったことに帰しがちである。
- ⑩ 友人関係の解消は、報酬が与えられなくなったためではなく、プライバシーの尊重や秘密の保持の規則が守られなくなったことによることが多い。
- ⑪ ある種の規則(信頼と尊敬の規則やプライバシーの尊重の規則)の違背が友人関係の破綻の原因だとされる。

そして、先行研究で開発した社会関係一般のルールと考えられるもの33と友人関係に特殊なルールと考えられるもの10の合計43のルールについて、イギリスで22組の友人関係にある各対象者に次のように評点してもらった。1点：非常に重要なルールである。3点：かなり重要なルールである。5点：どちらとも言えない。7点：あまり重要でない。9点：全く重要でない。そして、すべてのルールの平均得点を算出し、3点以下と7点以上の両極端を支持の強さを示す基準とし、3～7点を支持の弱さを示す基準とした。その結果、21の規則で強い支持が確認された。

次に分散分析を用いて、規則集合全体で、性差や年齢差を検討した。その結果、性差は見られたが年齢差は見られなかった。また、性差を示す規則をみると、次のよう言える。若い女性は若い男性よりも、友人との間で、誕生プレゼントをすべきで、宗教や政治について話してもよく、性や死について話してもよく、人前で相手への愛情を示してもよく、意図的に相手に触れてもよく、可能な限り相手によく見えるようにしなくてもよく、相手のプライバシーは守るべきで、目を見ながら話すべきで、情緒的に支援すべきで、病気の時には世話をすべきで、お互いに誠実であるべきで、お互いに信頼すべきだと思っている。また若い男性は若い女性より、相手の指導に従うべきで、会合では握手をすべきだと考えている。

さらに、以上と同様な質問紙調査をイタリア（76名）、日本（100名）、香港（94名）でも実施した。四つの文化のすべてで、強い支持を得た規則、つまり四つの文化で友人関係で重視されていた規則は、次の四つである。

- 31 相手のプライバシーを尊重すべきだ。
- 40 お互いに信用し、信頼すべきだ。
- 41 必要なときに助けるべきだ。
- 42 相手の他人との関係に嫉妬したり、批判するべきでない。

また、全対象者の43の規則についての回答を因子分析にかけたところ、固有値が1以上の因子が11あり、それらで、総分散の約60%が説明された。つまり、友人関係に関連する規則は、次の11に大別される。

- ① 言葉遣いの親密度や意見交換に関する規則。
- ② 支援性に関する規則。
- ③ 禁じられた行動に関する規則。
- ④ 情報を与えたり、配慮することに関する規則。
- ⑤ しきたりに関する規則。
- ⑥ 援助や忠告の要求に関する規則。
- ⑦ 自己提示に関する規則。
- ⑧ 情緒的関与に関する規則。
- ⑨ 時間を割いてもらうことについての規則。
- ⑩ 名称無し。
- ⑪ 交換に関する規則。

そして、文化ごとの因子スコアを比較して、日本人は友人関係において、実際の支援を重視し、相手に情報を与えたり、自己暴露したり、意見の交換をしたりすることは重視していないことが分かった。

最後に、18～25歳の男性46人、女性38人を対象として、次のような質問を行った。まず、

A：今現在親友だと思っている人

B：かつては親友だったが、今は親友ではない人

のなかから、本人と同姓で、同じぐらい長い付き合いで、先月に少なくとも一回は会ったことのある人を選んでもらう。次に、27のルールについて、

- 1 あなたはその友人に対して、次のルールを守っていますか？
- 2 その友人はあなたに対して、次のルールを守っていますか？

と聞き、選択肢（1. いつも守っている。2. 大体守っている。3. 守ることもある。4. 滅多に守らない。5. 全く守らない。）から選んでもらう。また、現在の友人関係を十点尺度で評定してもらう。

0点：非常に親しい、一番の親友。

5点：ちょっとした知り合い。

10点：大嫌い。

この分析結果から分かったことは、次のことである。

- ① 自己暴露、秘密を暴く、ニュースを伝える、時間を割くなどの規則に対する違反は自分に帰しやすい。
- ② 情緒的支援、自発的援助などの規則に対する違反は相手に帰しやすい。

以上の諸研究で、①強い支持を与えられた規則、②今の友と昔の友とで、自分の行動に差がある規則、③破綻の重要な原因とされた規則、④今の友で、良い関係の友とあまり良くない関係の友とで、自分の行動に差がある規則、これらすべてを満たす規則が、現在の親友で良い関係にある人との間で守るべきだとされた規則であると考えた。それは、次の六つである。

- 11 友達がいないときに、他人に対して擁護する。
- 17 友達と成功の知らせを分かち合う。
- 20 情緒的に支援する。
- 24 お互いに信用し、信頼する。
- 25 友達の必要な時に自発的に助ける。

27 一緒にいる時は、相手が幸せな気分になるように努める。

ここで、11,17,20,24は明らかに「心の友」との関係を維持する上で守る必要のあるルールと考えられるし、27は「気の合う仲間」との関係を維持する上で守る必要のあるルールと考えられ、25は両方に共通して必要なルールと考えられる。

#### (4) 社交的な人と人の気持ちを分かる人

ソシオメトリックな測定（好きな子、嫌いな子を選ばせるテスト）や評定尺度法（一緒に遊んだり、勉強したり、活動したりしたいかを問うテスト）を用いて、仲間との関係性により子どもを類型化すると四つのパターンがあることが、Coie,Dodge, & Coppotelli (1982)やNewcomb & Bukowski (1983)によって明らかにされている。それぞれのパターンは次のような特徴を持っている。

- ① 拒否される子ども；攻撃行動，ルール違反，妨害行動などの反社会的行動をとる。
- ② 受容される子ども；援助行動，仲間に対する友好的な接近行動，積極的な相互行為などの向社会的行動をとる。
- ③ 敵・味方の多い子ども；目立つ行動，社会的に最も積極的でリーダー的行動をとる。大人ともよく話をする。冗談を言って仲間を笑わせる。攻撃行動をとることもある。
- ④ 無視される子ども；共通の行動パターンはないが，周りからは引っ込み思案と思われる。攻撃行動は示さない。ある状況では仲間と積極的に行動する。

Ekman & Friesen (1975)は悲しみ、恐れ、驚き、嫌悪、幸福などの情緒を示す写真を選ばせるという、社会的認知の課題を与えると、無視される子（平均正答率83%）と人気のある子（77%）との間に正答率の差はないが、拒否される子（58%）は人気のある子ほど正しく知覚できないことを明らかにした。

また、Dodge (1984)は他者の意図を理解する能力に差があることを明らかにした。ある子どもが仲間の一人に対して挑発している場面を、写真による画面の提示方法を改良して、特別に準備したビデオによって短い物語を提示した。たとえば、ある一つの物語では、その子が仲間と絵を描いており、その子が仲間の絵に絵の具をこぼしてしまう。挑発者の意図は、ある時には敵意による行動であり、ある時には向社会的行動であり、またある時には偶発的な場合であった。こうした、他者の意図を解釈する能力を、ソシオメトリック地位別にみると、人気のある子（平均正答率63%）や平均的な人気の子（58%）と拒否される子（55%）や無視される子（53%）の間には有意な差があり、敵意ある意図を見抜く能力に差はないものの、偶発性や向社会的意図（好意）を認知する能力には差があった。嫌われる子や無視される子は人の好意に敏感ではないのだ。

また、Dodge (1983)は2年生児を観察し、ソシオメトリックな地位と仲間入り行動の間に次のような関係があることを観察した

- ① 人気のある子；仲間入りの試みにおいて、集団志向的な発言が多く、妨害的な行動は少ない。
- ② 拒否される子；妨害的な行動を多くとる。
- ③ 無視される子；待ったり、うろろする行動が多い。

以上のような児童期の友だち関係の研究の成果に従えば、友人を作りやすい人は向社会的（prosocial）で積極的な人、友人として望まれる人は共感性の高い（人の気持ちが分かる）人だと予測できる。

高校生や大学生の友人関係の研究では、社会探索的（social exploration preference）な人ほど、新しい事や変化を好み、新しい体験を求めるが、さらに、率先性や自尊心、社会的役割達成水準も高く、新しい学校環境やクラスに適応しやすいという（D.W.Edwards & J.G.Kelly,1980）。これらの研究を承けて、アメリカの東部の大規模な大学の新人寮生の友人関係の形成を研究した、H.I.Perl & E.J.Trickett (1988)は、社会探索的な人ほど、密度の高い、より双方向的な友人ネットワークを作り、キャンパス内の諸活動に熟知していて、クラブやその他の組織的グループに属していることが多く、問題を抱えたときにキャンパス内のフォーマル・インフォーマルな諸資源を活用することが出来ることを明らかにした。これらの研究からも、積極的に仲間作りをしどこにでも顔を出すような人が「友だち作りの上手い人」だといえるだろう。

### (5) 大学生の友人関係に関する仮説

以上の諸研究の論評に基づいて、以下の五つの仮説を立てた。

- ① 大学生の友人には大きく分けて、「心の友」と「気の合う仲間」がいる。「心の友」と「気の合う仲間」とでは、相互に与えるソーシャル・サポートの内容が異なる。「心の友」とは、相談助言、尊敬・評価、情緒的支援をしあう。「気の合う仲間」とは付き合い、ちょっとした手助けをしあう。
- ② 「心の友」と「気の合う仲間」とでは守るべきルールが異なっている。「心の友」に対して守らなければならない事は、人前で擁護し、秘密を守り、情緒的に支援し、自発的に援助し、信頼し、誠実に接することだ。他方、「気の合う仲間」に対してすべき事は、姓ではなく名前で呼びかけ、心の内をぶちまけ、うち解けた雰囲気でき、相手が気持ちよくなるように努め、プレゼントを贈ったり、予定を知らせておいたり、時間を割いてやることだ。
- ③ 大学生の男子はおもに「気の合う仲間」を作り、女子は「心の友」を作る。
- ④ 共感的な人は「気の合う仲間」より「心の友」を作りやすい。
- ⑤ 「心の友」を作る人のパーソナル・ネットワークは規模小、密度大の特徴を持ち、「気の合う仲間」を作る人のパーソナル・ネットワークは規模大、密度小の特徴を持つ。

## II 調査対象と分析方法

調査対象はS大学P学部G課程の1年生全員(76人)である。S大は地方都市の大学であることから、大谷(1995)が指摘するように、出身学校(小, 中, 高)が同じであるという既存のネットワークを中心とした友人形成、学内友人比率の高さ、学内の最も親しい人に「悩み相談」も「会話」も「遊び」もあらゆる側面で行動を共にする傾向などが見られると予測される。調査は2003年10月15日に行った。回収票は75票である。調査票は付録に示してあるものを用いた。ⅦはM.Argyle & M.Henderson (1984)の質問項目、またⅧはC.S.Fischer (1982)の調査項目をそれぞれ参考にした。Ⅸは出口・斉藤(1990, 1991)の共感性尺度の項目を用いた。またネットワーク分析にはG課程の名簿の載った友人・親友選択票を用いた。分析の方法は、仮説1については、次のような方法で友人類型を設定した。

- ① まず自由回答である質問VのQ2とQ3の記述内容をアフターコーディングし、次のような分類を得た。
  1. 友好性；気安さ、一緒に行動する、一緒に遊ぶ、一緒にいて楽しい、一緒にいたい、気が合う、リラックスできる、気をつかわない、冗談が通じる、軽いおしゃべり、挨拶を交わす、会う約束をする、一緒に長時間いられる、笑って話せる、楽しみの共有、など。
  2. 援助；困ったときに助ける。
  3. 親密さ；正直な気持ちを伝える、何でも話せる、率直に気持ちを伝える、本当の自分を見せられる、自分をさらけ出せる、素でいられる、地の自分を見せる、最も仲良し、思いやる、言いたいことを隠さず伝えられる、気心が知れ遠慮なく接する、親密である、以心伝心、無言で伝わる、精神的な深いつながり、喧嘩しても仲直り出来る、一番身近な人、嬉しいこと悲しいことを話したくなる、いることが当たり前の人、何かあったら話をしたい、何かあったときに初めに思い浮かぶ人、自信をもって好きといえる、など。
  4. 理解；相手の心を考える、自分のことを分かっている、心情理解、自分の欠点もすべて知っている人、相手のことを分かりたいと思う、など。
  5. 共感・尊重・情緒的支援；悲しみの共有、楽しいこと嬉しいことを共感出来る、悪いところも含めて認めあえる、そのまま受け入れる、尊重し合える、自分のことのように大切な人、なくてはならない人、親の次に大切な人、慰めてくれるなど。
  6. 相談・忠告・批判；親身になって相談に乗ってもらえる、相談する、深刻な悩みを相談する、自分のことを真剣に考えてくれる、悪いことを指摘してくれる、自分を説得する力を持っている、など。
  7. 信頼；心から信用している、信頼している、心を許せる、など。
  8. 永続性；一生の付き合い、死ぬまで友人、一生仲良くしていきたい人、など。

9. その他；プライベートの尊重，学校でしか会わない人，親しい仲にも礼儀あり，知人，話したことのある人，価値観の似ている人，など。

自由回答の質問にこれらの分類内容に言及があれば1，なければ0のダミー変数を与え，林の数量化理論第3類にかけた。この結果をもちいて，インパーソナルな友人・親友基準による友人・親友関係の類型を得た。

② 次に，ⅧのQ1～Q10を用いて，その回答に○の付けられたものに1，付けられなかったものに0のダミー変数を与え，75名が挙げたソーシャル・サポートの相手の内，親族を除いた473名について，主成分分析，因子分析，数量化第3類の各解析にかけ，最も納得のいく結果を示した主成分分析を用い後述する分類によって，パーソナルなサポート関係に基づく友人・親友関係の類型を得た。

これら二つの友人・親友類型はいずれも，

A型；友人も親友も「心の友」とするタイプ，

B型；友人も親友も「気の合う仲間」とするタイプ，

C型；友人は「気の合う仲間」親友は「心の友」と区別するタイプ

D型；それ以外のタイプ

に区分されている。

この友人・親友類型に基づき，仮説2～5を検証した。仮説2は質問ⅦのQ1～Q26友人関係のルール「あなたが一番の友人に対して行うこと」であてはまる選択肢の回答パターンを因子分析にかけ，各人の第一因子得点を用いて分析した。仮説3は男女別のパーソナル，インパーソナルな友人・親友関係の類型出現頻度に差があるかないかを検討した。仮説4は，質問ⅨのQ1～Q63を因子分析にかけ，共感性の各因子得点とクラス内友人・親友選択票から得た入次数および出次数との相関係数をもとめて，関連があるか否かを検討した。仮説5はクラス内友人・親友選択票をネットワーク分析にかけ，エゴネットワークの規模，密度，グローバルネットワーク内の位置（REGEによる中核・周辺），中核度などをUCINET6によって求め友人・親友関係の類型ごとに差があるかどうかを検討した。

### III 分析結果

#### (1) 仮説1について

インパーソナルな友人・親友基準についての自由回答での言及内容の出現パターンを数量化第3類にかけたところ，表1にみるような軸を得た。第一軸と第二軸はいずれも寄与率が低い，この二つの軸を用いて言及内容カテゴリーの親近性を示すと図1のようになる。これから，まず第一軸がプラスの値をとる友人基

表1 友人・親友カテゴリー得点および軸の固有値

カテゴリー名	1 軸	2 軸	3 軸
友人 1	0.008074	0.022773	0.053266
友人 2	-0.038622	-0.084594	0.160951
友人 3	-0.101753	0.294041	0.090301
友人 4	0.059901	-0.049702	0.191615
友人 5	0.010326	-0.117220	0.342152
友人 6	-0.003265	-0.004781	0.083942
友人 7	0.814219	0.182879	-0.072714
親友 1	-0.026942	0.020278	0.017810
親友 3	-0.017176	-0.043768	-0.008030
親友 4	0.119854	0.015091	0.007233
親友 5	0.003422	0.101422	-0.092937
親友 6	-0.010663	-0.009000	0.064490
親友 7	-0.036653	-0.069171	-0.095812
親友 8	-0.037589	0.180569	0.003911
固有値	0.5736	0.5413	0.4503
寄与率	13.8%	13.0%	10.8%
累積%	13.8%	26.9%	37.7%
相関係数	0.7574	0.7357	0.6710

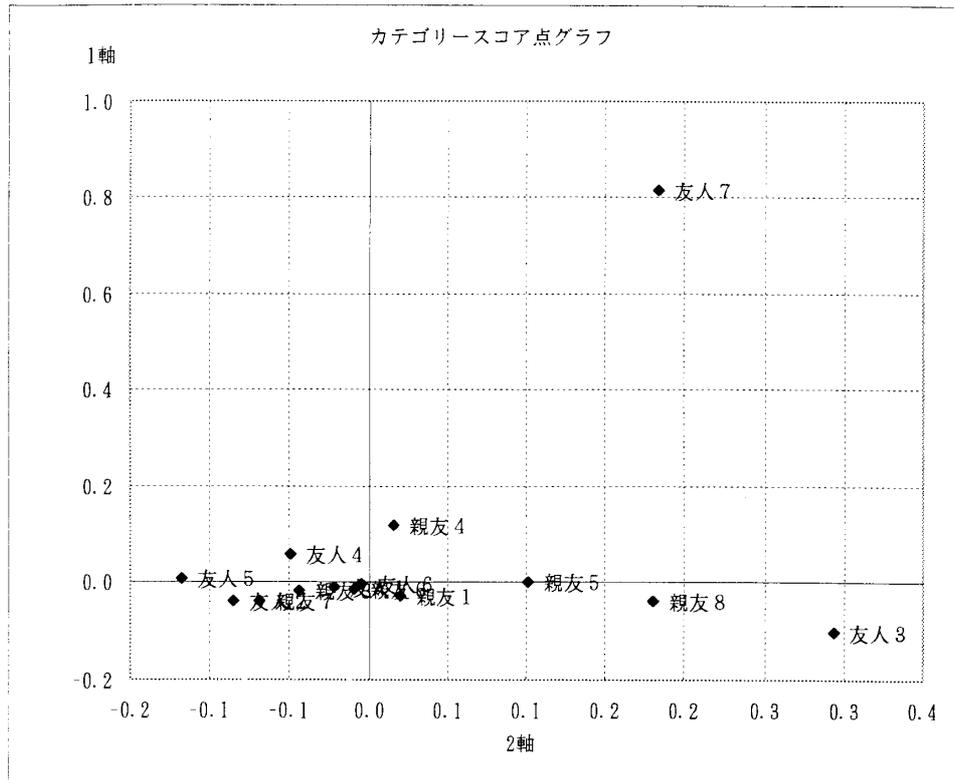


図1 友人親友基準の数量化3類によるカテゴリー得点分布図

準4, 5, 7 親友基準4, 5を一括りとした。ついで, それらを除き第二軸がプラスの値をとる友人基準3 親友基準1, 8を一括りとし, 最後に第二軸がマイナスの友人基準1, 2, 6 親友基準3, 6, 7を一括りとした。こうして, 次の類型を得た。

A型; 友人とは理解, 共感・尊重, 信頼の関係と考え, 親友とは理解, 共感・尊重の関係と考えるタイプ。友人基準がすでにかなり厳しく, 友人も親友も「心の友」と考えるタイプ。

B型; 友人とは親密な関係と考え, 親友とは友好性, 永続性を特徴とする関係と考えるタイプ。親友基準も緩く友人も親友もともに「気の合う仲間」と考えるタイプ。

C型; 友人とは友好性, 援助, 相談・忠告の関係と考え, 親友とは親密さ, 共感・尊重, 信頼の関係と考えるタイプ。友人は「気の合う仲間」親友は「心の友」と分けて考えるタイプ。

次に, パーソナルなソーシャル・サポートについての質問への回答パターンを因子分析と主成分分析にかけたところ, 親友と友人とでは因子得点や主成分得点との関係が表2のように明らかにな差がみられた。つまり親友と友人とでは相互に示さうソーシャル・サポートの内容に違いがあるということだ。主成分分析の結果をみると, 固有ベクトルは図2と表3のようになる。ソーシャル・サポートからみたパーソナルな友人類型をつくる軸としては, 報告(なにか良いことがあったら話したい), 理解(自分のことを理解し, 評価してくれる), 慰め(失敗したときに慰めてくれる), 助言(助言や忠告をしてくれる)そして相談, 遊びなどを包括する「心の友」軸と, 一緒に活動(なるべく一緒に授業をとる), ちょっとした手伝い(代返, お

表2 親友・友人別ソーシャル・サポート主成分平均得点と因子平均得点および相関比

	主成分1	主成分2	第一因子	第二因子	第三因子
親友	-0.7224	0.0281	0.3708	0.1042	0.0119
友人	0.8596	-0.0334	-0.4412	-0.1239	-0.0142
相関比	0.2177**	0.0006	0.2020**	0.0163**	0.0005

\*\*はF検定で1%水準で有意差あり。

表3 ソーシャル・サポート主成分分析と因子分析の結果

主成分固有ベクトル			因子 負 荷 量			
	主成分 1	主成分 2		因子 1	因子 2	因子 3
Q 1 授業	-0.0595	0.6606	Q 1 授業	-0.0418	0.8815	0.1232
Q 2 相談	-0.3131	-0.0828	Q 2 相談	0.4211	0.0018	0.0589
Q 3 お金	-0.1284	0.2977	Q 3 お金	0.0966	0.1063	0.5038
Q 4 遊び	-0.2693	-0.0609	Q 4 遊び	0.3462	-0.0516	0.1763
Q 5 報告	-0.4581	-0.0391	Q 5 報告	0.7130	0.1025	0.0279
Q 6 代返	-0.1104	0.6208	Q 6 代返	0.0572	0.4659	0.2145
Q 7 理解	-0.4531	-0.1254	Q 7 理解	0.7477	0.0322	-0.0771
Q 8 情報	-0.0366	0.2406	Q 8 情報	0.0321	0.2000	-0.1248
Q 9 慰め	-0.4499	-0.0366	Q 9 慰め	0.6836	0.0402	0.1942
Q 10 助言	-0.4222	-0.0507	Q 10 助言	0.6386	0.0722	-0.0255
固有値	2.86	1.54	二乗和	2.26	1.07	0.41
寄与率(%)	28.58	15.37	寄与率(%)	22.55	10.66	4.10
累積(%)	28.58	43.96	累積(%)	22.55	33.21	37.32

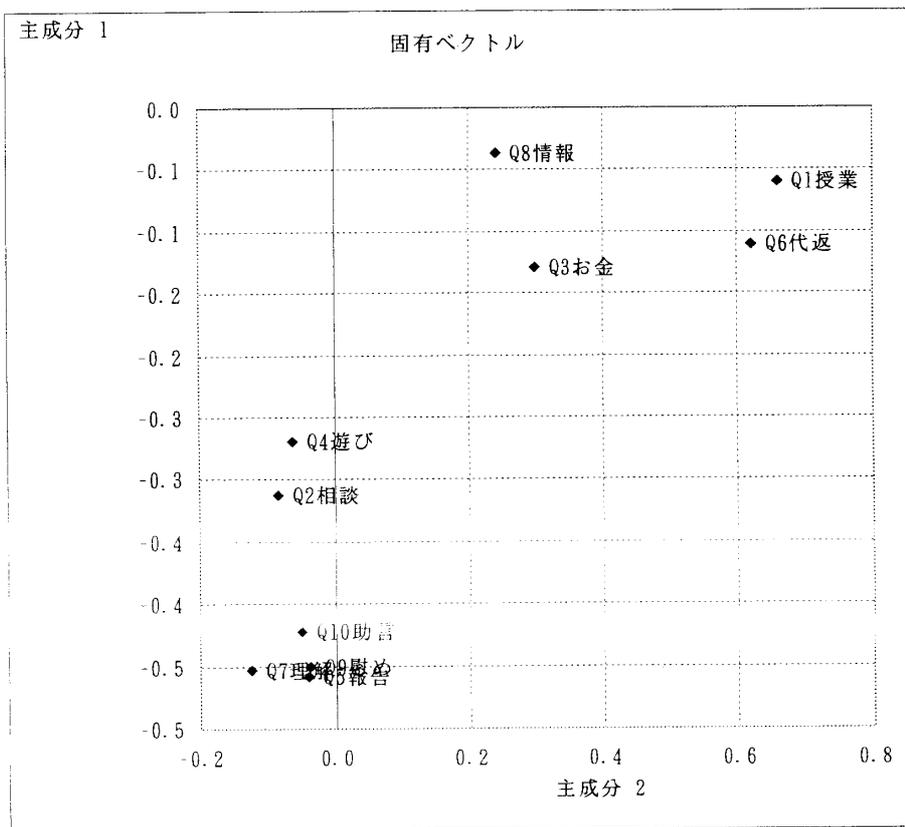


図2 ソーシャル・サポート主成分固有ベクトル

金を貸す), 情報提供 (アルバイト情報を与える) などを含む「気の合う仲間」軸が得られる。この主成分得点のパターンから友人類型を考えてみる。すなわち, 主成分分析の第一成分得点に着目し,

- ① 一の値をとる親友数  $\geq$  十の値をとる親友数, かつ一の値をとる友人数  $\geq$  十の値をとる友人数 (ただし友人数が0の場合を含む) である個人は親友も友人も報告, 理解, 慰め, 助言の相手として活用していることを示しているのので, ともに「心の友」としてサポートし合っているA型と考えられる。

表4 インパーソナルな基準とパーソナルなサポートとによる友人類型

		友人類型②					
		A 型	B 型	C 型	D 型	計	②類型構成比
友人類型①	A 型	9	4	5	1	19	25.0%
	B 型	3	5	7	0	15	19.7%
	C 型	11	12	18	0	41	54.0%
	分類不能	0	0	1	0	1	1.3%
	計	23	21	31	1	76	100.0%
	②類型構成比	30.3%	27.6%	40.8%	1.3%	100.0%	

② 一の値をとる親友数 $\geq$ 十の値をとる親友数, かつ一の値をとる友人数 $<$ 十の値をとる友人数である個人は, 親友にもっぱら報告, 理解, 慰め, 助言の相手を求め, 友人にはあまり求めないことから, 親友を「心の友」友人を「気の合う仲間」としてサポートし合っているB型と考えられる。

③ 一の値をとる親友数 $<$ 十の値をとる親友数, 一の値をとる親友数 $\leq$ 十の値をとる親友数(ただし親友数が0の場合を含む)である個人は親友にも報告, 理解, 慰め, 助言のサポートを求めているので, 友人も親友もともに「気の合う仲間」としてサポートし合っているC型と考えることができる。

このように, パーソナルなソーシャル・サポートの授受においてもA型, B型, C型が析出されたが, インパーソナルな基準による類型への分類とではかなりの不一致がある。表4にみるように両者の分類で一致した類型に分類される個人は32人(42.1%)にすぎない。パーソナルな関係ではインパーソナルな基準よりもA型, B型が増え, C型が減っている。つまり, 友人とは何か? 親友とは何か? について答えた記述にみられる言及で設定した, 友人類型では約54%の人が心の友としての親友と気の合う仲間としての友人を分けていたが, 実際のソーシャル・サポートの授受では, そうした区別をする人は41%に減っている。そして友人も親友も心の友として接する人は約3割, 友人も親友も気の合う仲間として接する人が約28%いる。

以上から, 大学生の友人・親友関係には「心の友」と「気の合う仲間」がいて, 心の友には親密さ, 理解, 情緒的支援, 助言などのサポートを求め, 気の合う仲間には友好性, ちょっとした手助けなどのサポートを求める。しかし友人も親友も「心の友」とする人(A型)もいれば, 友人は「気の合う仲間」親友は「心の友」と区別する人(C型), さらに友人も親友も「気の合う仲間」として接する人(B型)の三つのタイプに大別され, インパーソナルには最後のタイプが過半を占めるものの, パーソナルな接し方では三つのタイプの出現比率の差が縮まることが分かる。仮説1はほぼ支持された。

## (2) 仮説2について

同性の最も親しい友人に対して行っている行動(質問ⅦのQ1~Q26)の自己評点を因子分析にかけると表5のような因子負荷量が得られる。第一因子は気持ちをおちまけたり, 信用したり, 援助したり, プライバシーを尊重したり, 落ち込んでいたら慰めたり, 真っ先に成功を知らせたり, 冗談を言ったり, 時間を割いたり, 忠告したり, 不在の友人を弁護したりする内容から親友性の因子と呼べよう。第二因子は相手が気持ちよく過ごせるように努め, 少しの借りでも返し, 良く思われるように振る舞うという内容から相手への配慮の因子と呼べよう。また, 第三因子は不介入の因子, 第四因子は手段的援助の因子といえるだろう。第一因子得点を友人関係類型別にみたものが表6である。これから, 親友関係を円滑にするためのルールはA型, B型, C型で異なるといえるだろうか。インパーソナルな類型では, A型とC型は+, B型は-の値をとっているがそれぞれその絶対値はそれほど大きくない。またパーソナルな類型では男女でかなり異なる。すなわち, 女性では親友も友人も「心の友」としてサポートを授受し合う人は「気のあった仲間」としてサポートを授受し合う人よりも, 自分の気持ちをおちまけ, 友人を信用し, 自発的に手助けし, 落ち込んでいたら慰め, 成功を真っ先に知らせ, 冗談を言ったり, 時間を割いてやったり, 個人的な忠告をしたり, 不在の場面で友人を弁護してやるなどの親友性ルールを守るといえる。しかし, 男性では, そうした親友性ルールを一番守るのは, 親友を「心の友」友人を「気の合う仲間」として分ける人だといえる。しかし, 友人ルー

表5 友人間ルールの因子負荷量

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
気持ち	<b>0.7657</b>	-0.0482	-0.1369	-0.1176
信用	<b>0.7536</b>	0.0902	-0.0821	0.1122
援助	<b>0.7260</b>	0.3254	0.1835	0.0800
尊重	<b>0.7041</b>	0.4983	-0.2027	0.0492
慰め	<b>0.6747</b>	0.3158	-0.0924	0.1217
知らせ	<b>0.6731</b>	0.2005	-0.0763	0.0500
冗談	<b>0.6633</b>	-0.0858	-0.0333	-0.0614
時間	<b>0.5590</b>	0.3941	-0.0565	0.0644
忠告	<b>0.5537</b>	-0.0314	-0.0162	-0.1120
弁護	<b>0.5156</b>	0.3813	-0.0132	0.0256
快適	0.1555	<b>0.6673</b>	-0.0606	0.0407
返済	0.1905	<b>0.6215</b>	-0.0364	0.1640
振る舞い	-0.2763	<b>0.5055</b>	-0.1203	0.3245
口出し	0.3068	0.2743	<b>0.7532</b>	0.0607
看病	-0.0939	0.0504	-0.0256	<b>0.7543</b>
贈り物	0.2154	0.1368	-0.1080	<b>0.5968</b>
誠実	0.4181	0.3435	-0.0795	0.2400
触れあい	0.2128	0.0295	-0.4835	0.2399
従う	0.0896	0.2952	-0.4224	0.1635
予定	0.1423	0.0988	-0.2947	0.0676
名前	0.4419	0.1959	0.1341	0.0592
ガミガミ	0.0873	0.3792	0.4331	0.0553
目	0.4928	0.3359	-0.3479	0.0401
秘密	0.4200	0.4775	0.0817	-0.0833
避ける	0.1034	0.3791	0.0690	-0.1545
批判	0.0846	0.2922	0.2339	-0.4058

表6 友人類型別友人ルール第一因子平均得点

		全体	男	女
友人類型①	A型	0.060	0.352	-0.051
	B型	0.231	0.198	0.243
	C型	0.039	0.198	0.003
友人類型②	A型	-0.092	-0.478	0.045
	B型	0.064	0.215	-0.059
	C型	0.012	0.467	-0.174

表7 友人類型、性別と友人ルール因子得点との相関比

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
友人類型①	0.0229	0.0265	0.0215	0.0998
友人類型②	0.0073	0.0228	0.0279	0.0533
性別	0.0099	0.1104*	0.0610	0.1050*

\*はF検定5%水準で有意差あり。

ルの各因子の得点と友人類型との間の相関比を見ると表7のようになる。四つの因子ともインパーソナルな友人類型、パーソナルな友人類型のいずれとも有意な相関はないことが分かる。このように仮説2は大幅に修正しなければ支持されない。

### (3) 仮説3について

表8は男女別のインパーソナル、パーソナルな友人類型の出現頻度から各種の独立係数をみたものである。これからインパーソナルでは男女差が全くない事が分かり、パーソナルでは5%水準で有意差はないものの一定の男女差がみられる事が分かる。つまり、インパーソナルな友人・親友基準では男子が友人・親友を「気の合う仲間」女子が「心の友」として考えているということはない。しかし、実際のパーソナルなソーシャル・サポートでは男子、女子とも親友は「心の友」友人は「気の合う仲間」として接している者が最も多いものの、男子では女子よりも友人も親友も「気の合う仲間」として接する者が多く、女子では男子より友人も親友も「心の友」として接する者が多い。このように、パーソナルなソーシャル・サポートの面でのみ仮説3はわずかに支持されるにすぎない。

表8 友人類型と性別との関連

	ピアソン係数	クラメール係数	$\phi$ 係数
友人類型①	0.074	0.074	0.074
友人類型②	0.180	0.183	0.166

### (4) 仮説4について

表9は質問ⅨのQ1～Q63の共感性尺度に対する回答を因子分析にかけ得られた因子負荷量を示したものである。これから、第一因子は人の気持ちの推測、第二因子は架空の人物への感情移入、第三因子は他者への感情移入、第四因子は同情、第五因子は他者との喜びの共有、第六因子は情緒的感染、第七因子は共通感情、第八因子は情緒的自立をそれぞれ示すものと解釈出来る。抽出された因子は斉藤らの分析とは全く異なるものであるが、因子分析の記述的性格からして、被調査対象ごとでこうした違いが見られることは不思議ではない。また、これら八つの因子の得点と性別、インパーソナルな友人類型、パーソナルな友人類型との間の相関比（ここでは表示しないが）をみると、いずれも有意な関連がないことが分かる。つまり、男女間や友人類型間で共感性に差はないということだ。つまり仮説4は支持されなかった。そこで、これらの因子得点とネットワーク分析で得られたクラス内友人選択の入次数および出次数との相関係数をみたものが表10である。これから、第三因子の他者への感情移入、第四因子の同情、第七因子の共通感情が入次数と有意な相関があることが分かる。これから、他者への感情移入、すなわち他人の苦しみや困難に対して親身になって心配する人や同情心の強い人、他者と共通感情を持ちやすい人は多くの他者から友人として選択されやすいことが分かる。また、第四因子と第七因子が出次数と有意な相関をしていることが分かる。すなわち他者への同情心が強い人や他者と共通感情を持ちやすい人は多くの友人を選択しやすいことが分かる。

### (5) 仮説5について

図3はクラス内の友人選択のネットワークを測地線距離で遠近表示したグラフである。これより男女別の大グループの存在がみてとれる。表11は友人ネットワークと親友ネットワークの規模および密度を男女別・友人類型別にみたものである。これから、まず、インパーソナルな友人類型でみて、クラス内で形成された友人ネットワークでは、友人も親友も「心の友」とするA型で、規模が20.0と最も大きく、友人は「気の合う仲間」親友は「心の友」と区別するC型で16.4と最も小さい。これは親友ネットワークでみるともっとはつきりした形で現れる。すなわち、A型ではクラス内に親友が10.1人いるのに対して、C型では2.0人しかいない。これはおそらくC型では「心の友」が大学入学以前にすでにほとんど形成されているためだろう。しかし、C型の友人ネットワークの密度は最も高く「気の合う仲間」はこのタイプでは結束の強いグループを形成している。

表9 共感性因子負荷量

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7	因子 8
Q 41	<b>0.7318</b>	0.0337	-0.0312	0.0643	0.0241	-0.0842	0.0612	0.0268
Q 40	<b>0.7203</b>	0.0835	-0.1304	0.0582	0.0221	-0.0677	-0.1247	-0.0191
Q 39	<b>0.6612</b>	0.1751	-0.1006	-0.0294	0.0516	-0.0203	-0.0308	0.1315
Q 27	<b>0.5523</b>	0.0996	-0.3333	-0.0625	0.0539	-0.0166	-0.0995	0.1049
Q 60	<b>0.5328</b>	0.3561	0.0311	0.0392	0.3249	0.1408	-0.1118	-0.1405
Q 46	<b>0.5233</b>	0.1736	-0.0157	0.0960	0.2743	0.2150	0.0392	0.1511
Q 59	0.0755	<b>0.8444</b>	-0.0316	0.0758	0.0768	-0.0805	-0.1622	0.0389
Q 58	0.3306	<b>0.8016</b>	-0.1176	0.0178	-0.0723	0.0033	-0.0244	0.0460
Q 17	0.1838	<b>0.6222</b>	-0.0838	0.1064	0.1444	-0.1279	0.1044	-0.0270
Q 29	0.2245	<b>0.5995</b>	-0.3983	0.1596	0.0113	-0.0589	-0.1080	0.0630
Q 22	-0.0565	<b>0.5918</b>	-0.3034	0.1917	0.2997	-0.0272	-0.0069	0.0440
Q 16	0.0352	0.1586	<b>-0.5550</b>	0.0467	0.0376	-0.1041	-0.2604	-0.0449
Q 28	0.3213	0.1221	<b>-0.5034</b>	0.1890	-0.0352	0.0418	-0.0683	0.2396
Q 20	0.1500	0.0493	<b>-0.5020</b>	0.4734	-0.1352	-0.0329	0.0202	0.0805
Q 42	0.2609	0.1071	<b>-0.5009</b>	0.0097	0.2737	-0.0746	-0.3187	-0.1045
Q 53	-0.3552	-0.0421	-0.2925	<b>-0.5923</b>	-0.2812	-0.1418	-0.1200	-0.0202
Q 12	-0.0224	-0.1439	0.1687	<b>-0.5762</b>	-0.1665	-0.1434	0.1607	0.0124
Q 13	-0.1279	-0.1134	0.1354	<b>-0.5036</b>	-0.2262	0.2498	-0.0734	-0.2306
Q 45	0.1725	0.1485	-0.1009	0.1254	<b>0.8096</b>	-0.0881	0.0380	0.1010
Q 44	0.2039	0.0949	-0.0219	0.0604	<b>0.7185</b>	-0.0604	-0.0723	-0.0365
Q 43	0.2338	0.1456	-0.3382	0.1281	<b>0.6406</b>	-0.0885	-0.0664	-0.0022
Q 7	0.1009	0.1281	-0.0423	0.1271	0.0961	<b>-0.5891</b>	0.0031	-0.0208
Q 6	-0.0670	0.0340	-0.1760	-0.1335	-0.0001	<b>-0.5402</b>	-0.1959	-0.2253
Q 50	0.0258	-0.1125	-0.1105	-0.0145	0.1494	0.1235	<b>-0.6539</b>	0.3062
Q 15	0.1145	0.0432	0.0649	-0.0571	-0.0243	-0.0191	-0.0259	<b>0.5982</b>
Q 3	0.0850	0.1708	0.0892	-0.1034	0.0453	-0.4402	-0.0063	0.2820
Q 8	0.3654	0.1179	0.0734	0.2415	0.1167	0.0236	0.1766	0.2477
Q 47	0.0909	0.2413	-0.3645	-0.0732	0.4166	-0.0235	-0.0558	0.2334
Q 26	-0.0759	0.1131	-0.1136	0.0965	0.2535	-0.1904	-0.3126	0.1882
Q 24	0.1651	0.3624	-0.1570	0.3854	-0.1705	-0.2139	-0.2555	0.1262
Q 35	0.1115	-0.1699	0.3706	-0.3693	-0.2768	0.0681	0.0567	0.1088
Q 55	-0.1666	-0.0216	0.2891	-0.2709	-0.3045	-0.2459	-0.3118	0.0749
Q 51	0.1634	0.0404	-0.0966	-0.4792	0.0994	0.0490	-0.0518	0.0600
Q 57	-0.0429	-0.0352	0.0353	-0.2136	0.0141	-0.4878	0.3040	0.0481
Q 9	-0.1106	0.3223	-0.3906	0.2258	0.1317	-0.1204	-0.2339	0.0453
Q 5	0.0598	0.3047	-0.2273	0.3532	0.0614	-0.1503	-0.1556	0.0308
Q 30	0.1874	0.4349	-0.3149	-0.0585	0.1855	0.0622	-0.0319	0.0175
Q 54	-0.0766	-0.0290	0.3882	0.0649	-0.1096	0.0474	-0.1139	0.0160
Q 33	0.0836	-0.0143	0.3062	-0.3344	-0.2924	0.0653	-0.0149	0.0137
Q 4	0.3338	0.1860	-0.1635	0.1376	0.0542	-0.4243	-0.0898	-0.0008
Q 36	0.0967	0.3392	-0.3507	-0.0461	0.0352	0.0133	-0.0847	-0.0010
Q 19	0.2125	-0.0009	-0.0890	0.5127	0.0991	-0.2557	-0.2590	-0.0371
Q 11	0.2644	0.1984	0.1131	-0.2248	-0.1058	0.5435	0.1076	-0.0517
Q 49	0.1932	0.2272	0.0585	0.2157	0.1438	0.0694	-0.4469	-0.0597
Q 10	0.1864	-0.1661	0.3206	0.4003	0.0778	0.4502	0.1160	0.0900
Q 25	-0.0135	0.1167	-0.4708	-0.1249	0.2583	-0.0807	0.0144	-0.0988
Q 56	-0.0863	-0.1649	-0.0617	-0.4353	-0.2751	-0.1731	0.2978	-0.1003
Q 34	0.1586	-0.4799	0.2337	-0.2503	-0.3605	0.1278	-0.0417	-0.1128
Q 37	0.4448	0.3891	-0.0875	-0.0658	0.1486	-0.1522	-0.0693	-0.1166
Q 38	0.3893	-0.0597	-0.1036	0.0638	-0.0624	-0.2541	-0.3431	-0.1271
Q 62	-0.0227	0.2825	0.0914	-0.0722	0.1158	0.2575	-0.1434	-0.1353
Q 63	0.1815	0.4050	0.1550	-0.0619	0.0092	0.2798	0.1862	-0.1362
Q 52	-0.0743	-0.0956	0.4916	-0.2200	0.0102	0.2159	-0.1113	-0.1413
Q 1	0.0973	0.1157	-0.0661	0.0415	-0.1267	-0.1695	-0.4627	-0.1536
Q 18	0.3418	0.0504	-0.2725	0.2115	0.1478	-0.3580	-0.1119	-0.1542
Q 21	0.3075	0.1577	-0.3896	0.1714	0.0658	-0.1183	-0.2251	-0.1809
Q 14	0.0428	-0.0127	0.2361	-0.1787	-0.2828	0.0472	0.0810	-0.1869
Q 48	0.3516	-0.0349	-0.4179	0.2812	0.2140	-0.1561	-0.1362	-0.2117
Q 61	0.4219	0.3913	-0.3083	-0.0079	-0.0298	0.0499	-0.2256	-0.2786
Q 2	0.3687	0.1487	-0.2144	0.4382	0.0869	-0.4433	-0.2002	-0.2789
Q 32	0.3358	0.0259	0.1474	-0.1737	0.1181	0.2890	-0.0017	-0.2947
Q 23	0.2572	0.1898	-0.1657	-0.3212	0.1113	-0.1898	-0.0715	-0.3904

表10 入次数、出次数と共感性因子得点との相関係数

	入 次 数	出 次 数
因子 1	-0.052	-0.0721
因子 2	0.1542	0.0604
因子 3	-0.2512*	-0.1870
因子 4	0.3136**	0.2542*
因子 5	-0.1969	-0.2291
因子 6	0.0461	-0.1041
因子 7	-0.2356*	-0.2485*
因子 8	0.0377	0.0361

\*は5%水準、\*\*は1%水準で有意

クラス内で形成されている親友ネットワークをみるとさらに興味深い点が現れてくる。つまり友人も親友もすべて「心の友」と考えるA型のクラス内親友規模は最大で、しかも友人ネットワークの約半数のものが親友ネットワークに含まれ、密度は友人ネットワークのそれよりさらに高い51.0%となっている。このようにA型は大学入学後にクラスの中でかなり結束の強い「心の友」のグループを形成している。それに対して、B型とC型ではクラス内の親友ネットワークは2.7と2.0でそれぞれの友人ネットワークの1割前後の規模でしかないし、その密度も低い。つまり、B型やC型の人々はクラス内に親友が少なく、その親友同士は親友として選択し合っていない。また、パーソナルな友人類型では規模や密度との間に一貫した関係は見られなかった。このように、仮説5は反証された。

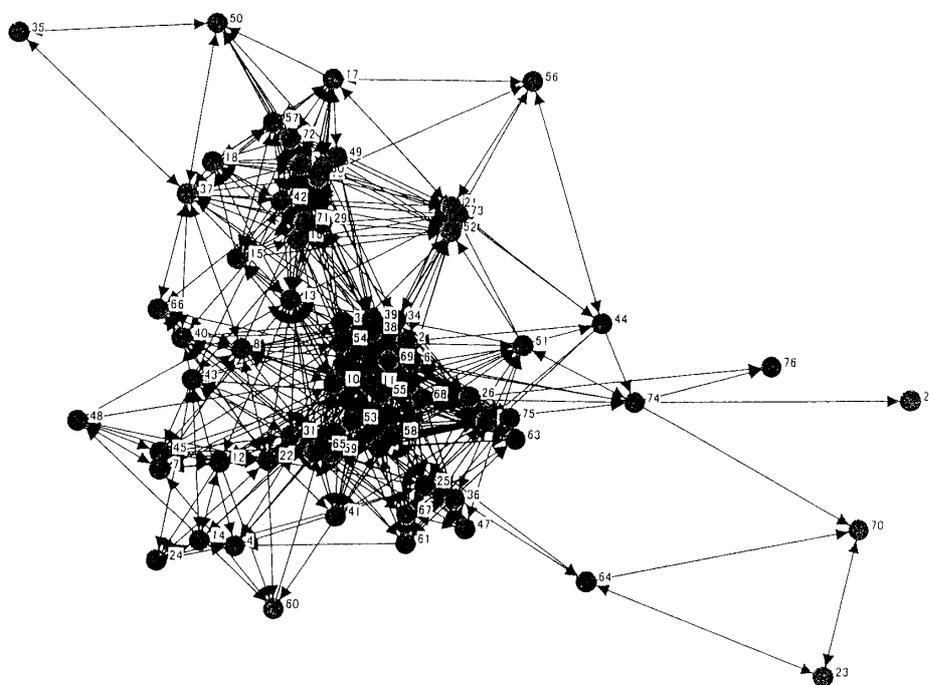


図3 クラス内友人選択関係の測地線距離表示

表11 インパーソナルな友人類型別クラス内友人・親友ネットワーク規模、密度

		A 型	B 型	C 型
友人ネットワーク	規 模	20.00	18.13	16.37
	密 度	48.79	42.73	51.46
親友ネットワーク	規 模	10.11	2.67	2.00
	密 度	51.00	31.07	27.18

#### IV 結 論

大学生の友人関係には、インパーソナルには理解、共感、信頼といった基準で括られ、パーソナルには尊敬的支援、情緒的支援、情動的支援といったソーシャル・サポート（伊賀，2002）で支え合う「心の友」とインパーソナルには友好性、親密さといった基準で括られ、パーソナルにはネットワーク支援、有形の援助といったソーシャル・サポートで支え合う「気の合う仲間」とがある。そして、友人も親友も「心の友」として考えたり、サポートし合うタイプ（A型）、友人も親友も「気の合う仲間」として考えたり、サポートし合うタイプ（B型）、さらに友人は「気の合う仲間」、親友は「心の友」と区別して考えたり、サポートし合うタイプ（C型）がいる。しかし、インパーソナルな友人・親友基準と実際のパーソナルな友人・親友サポート関係とは一致するとは限らない。

そして、一番の親友に対する行動ルールをみると、親友性のルール（気持ちをぶちまけ、信用し、援助し、プライバシーを尊重し、落ち込んだら慰め、真っ先に成功を知らせ、冗談を言い合い、時間を割き、忠告し、不在の時に弁護する）は、インパーソナルな友人基準類型では差がないが、パーソナルな友人関係類型では差があり、女子ではA型の人、男子ではC型の人が最も親友性のルールを守っている。

また、インパーソナルな基準による友人・親友類型は性差が無く、パーソナルなソーシャル・サポートによる友人・親友類型は、男女とも最も多いタイプはC型であり、有意差はないが女子でA型、男子でB型が相対的に多い。

そして、いずれの友人・親友類型でみても共感性に差はない。しかし、共感性とりわけ、他者への感情移入、同情心、共通感情を持ちやすい人は、新しい環境（新入生のクラス）の中で、友人として選択されやすく、また友人を作りやすい。

最後に、本稿は社会変動がもたらす青年期友人関係の変容をテーマとするものではないが、それらの研究で指摘されている1.5次関係（高橋，1988，1992）や関係利用型私化志向（小西，1999，2001）の面もデータの中に垣間見ることができた。全体的に見ると、親密性を友人や親友に求める傾向が強く、親友に対しては更に理解、共感、信頼を求める人が多いことから、今では古いと思われる「心の友」が現代の若者の中にも生きていていると思われる（小西，2002）。しかし、「気の合う仲間」とのサポート内容が、代返を頼むとか、なるべく授業を一緒にとるといった、ちょっとした手助けや友好性に限られていること、友人関係ルールの第二因子や第三因子が親密性とは相反する傾向をもつ行動ルールであること、さらに本稿では分析しなかったが、質問ⅥのQ7～Q10に肯定的な回答をした者がかなりいることを考えると、お互いに干渉しない距離を保ちながら、友人関係を私的利益追求に利用し合う若者もかなりいることがみてとれる。

#### 参考文献

- Argyle, M., & M. Henderson, 1984, "The Rules of Friendship." *Journal of Social and Personal Relationships*, 1:211~37.
- Babchuk, N., & A. Bates, 1963, "The primary relationships of middle class couples: a study in male dominance." *ASR* 28:377~384.
- Bengtson, V. L., & R. E. L. Roberts, 1991, "Intergenerational Solidarity in Aging Families: An

- Example of Formal Theory Construction.” JMF53:856~870.
- Cohen, C.I., & H. Rajkowski, 1982, “What’s in a Friend? Substantive and theoretical issues.” *The Gerontologist* 22:261~6.
- Coie, J.D., K.A. Dodge & H. Coppotelli, 1982, “Dimensions and types of social status: A cross-age perspective.” *Developmental Psychology*, 18:557~71.
- 出口保行・斉藤耕二, 1990, 「共感性尺度の因子分析的研究」東京学芸大学紀要1部門41:183~96頁。
- , 1991, 「共感性の発達的研究」東京学芸大学紀要1部門42:119~34頁。
- Dodge, K.A., 1983, “Behavioral antecedents of peer social status.”, *Child Development*, 54:1386~99.
- Dodge, K.A., R.M. Murphy, & K. Buchsbaum, 1984, “The Assessment of intention-cue detection skills in children: Implications for developmental psychopathology.” *Child Development*, 55:163~73.
- Edwards, D.W., & J.G. Kelly, 1980, “Coping and adaptation: A longitudinal study.” *American Journal of Community Psychology*, 8:203~16.
- Ekman, P., & W.V. Friesen, 1975, *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Fischer, C.S., 1982, “What do we mean by ‘Friend’?: An inductive Study.” *Social Network*, 3:287~306.
- Fischer, C.S. & S.J. Oliner, 1983, “A Research Note on Friendship, Gender, and the Life Cycle.” *Social Forces* 62(1):124~33.
- Gans, H., 1967, *The Levittowners*. New York: Free Press.
- Gottman, J., & G. Mettetal, 1986, “Speculations about social and affective development: friendship and acquaintanceship through adolescence.” in J. Gottman & J. Parker (ed.), *Conversations of Friends: Speculations of Affective Development*, New York: Cambridge University Press.
- Hays, R.B., 1984, “The development and maintenance of friendship.” *Journal of Social and Personal Relationships*, 1:75~98.
- , 1985, “A Longitudinal Study of Friendship Development.” *Journal of Personality and Social Psychology*. 48(4):909~24.
- 伊賀光屋「インフォーマル・サポート・ネットワークの構造モデルをめざして」新潟大学 教育人間科学部紀要 第5巻第1号 129~152頁。
- Keller, S., 1968, *The Urban Neighborhood*. New York: John Wiley.
- Kon, I.S., & V.A. Losenkov, 1978, “Friendship in Adolescence: Values and Behavior.” JMF40:143~55.
- 小西二郎, 1999, 2001, 「変動期における青年の〈友人ネットワーク—自己〉の連関に対する分析視角の検討(上)(下) —高橋勇悦氏の「1.5次関係」論を手掛かりにして—」北海道大学教育学部紀要79号145~168頁。北海道大学教育研究科紀要83号237~259頁。
- , 2002, 「『ノンエリート』青年の『社会形成』—北海道小樽市A工業高校出身者を事例として—」唯物論研究年報第7号, 313~340頁。
- Mugford, S., & H. Kendig, 1986, “Social relations: networks and ties.” in H. Kendig (ed.), *Aging and Families: A Social Networks Perspective*. Sydney: Allen & Unwin.
- Newcomb, A.F., & W.M. Bukowski, 1983, “Social impact and social preference as determinants of children’s peer group status.” *Developmental Psychology*, 19:856~67.
- 大谷信介, 1995, 「〈都市的状況〉と友人ネットワーク—大都市大学生と地方都市大学生の比較研究—」松本康編「増殖するネットワーク」勁草書房, 131~173頁。
- Perl, H.I., & E.J. Trickett, 1988, “Social Network Formation of College Freshmen: Personal and Environmental Determinants.” *American Journal of community Psychology*, 16(2):207~24.
- Rose, S., & F.C. Serafica, 1986, “Keeping and ending casual, close and best friendships.” *Journal of*

- Social and Personal Relationships, 3:275~88.
- Selman,R., 1976, "The development of interpersonal reasoning." in A.Pick(ed.), Minnesota symposia on child psychology (Vol.10), Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Shulman,N., 1975, "Life-Cycle Variations in Patterns of Close Relationships." JMF, 37:813~821.
- Sullivan,H.S., 1953, The Interpersonal Theory of Psychiatry. New York:: Norton.
- 高橋勇悦 1998, 「大都市青少年の人間関係の変容—1.5次関係の概念に関する覚え書き」東北社会学会編「社会学年報」
- Wenger,G.C., 1989, "Support Networks in Old Age: Constructing a Typology." in M.Jefferys(ed.) Growing Old in the Twentieth Century. London: Routledge.
- , 1995, "A Comparison of Urban with Rural Support Networks: Liverpool and North Wales." Ageing and Society, 15:59~81.

付録一友人関係に関する質問紙

- I 学生番号( ) 氏名( ) 性別(男・女) 年齢( ) 歳
- II あなたには何人の友人や親友がいますか?
- Q1 友人( )人、内大学に入ってからできた学内の友人( )人  
 高校までに友人となった人で、同じ新大生となり今も友人の人( )人
- Q2 親友( )人、内大学に入ってからできた学内の親友( )人  
 高校までに親友となった人で、同じ新大生となり今も親友の人( )人
- III あなたは現在クラブやサークルに所属していますか?
- 1 所属している。 その数( )
- 2 所属していない。
- IV あなたは学習社会ネットワーク課程のクラスはみんなでうまくやっけていけそうな雰囲気があると思いますか?
- 1 そう思う
- 2 そう思わない
- 3 分からない
- V あなたは次のどちらに当てはまりますか? 当てはまる方に○をつけてください。
- 1 毎日の生活の中で、新しい体験をしたり、変化のある生活をするのが好きである。
- 2 毎日同じことを規則的にやって、次に起きることが予測でき、安定した日々を送るのが好きである。
- VI 次の各質問について、そう思うものには○を、そう思わないものには×を括弧に記入してください。
- Q1 ( ) 私は今まで学校のクラブ活動や生徒会活動に進んで参加する方ではなかった。
- Q2 ( ) 気をつけていないと、人は弱みにつけ込もうとすると思う。
- Q3 ( ) 人の集まりで、他の人たちが自分の考えに同意しないのではないかと思い、自分の意見をはっきりと主張することができない。
- Q4 ( ) 私は、集団の中で、自分の正しいと思うことをはっきりと表明できる。
- Q5 ( ) 私は、コンパやパーティーで他の人を和ませたり、楽しませたりする社交性がある。
- Q6 ( ) 自分は良くないと思うことを、周りの仲間がやっている時に、断り切れないことがある。
- Q7 ( ) 本当に信頼のおける人はなかなかいないものだ。
- Q8 ( ) 和やかに、気楽にやっていくには、他人とうまくやっけていかなければならないが、それ以上に親密になる必要はない。
- Q9 ( ) たとえ好意が持て、共に活動してきた人でも、その人を本当に知ることはなかった。
- Q10 ( ) 他人と親しくなりすぎない方が幸せである。
- VII 同性の最も親しい友人を一人思い浮かべて、その人との関係について次の各問いに当てはまる選択肢を1～5から選んで○で囲んでください。
- |     | あなたは                    | 相手は                 |
|-----|-------------------------|---------------------|
| Q1  | 姓でなく名前前で呼ぶ              | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q2  | 自分の気持ちをぶちまける            | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q3  | 個人的な忠告をする               | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q4  | 人前で批判しない                | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q5  | 友人が不在の場面で友人が批判されたら弁護する  | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q6  | 友人が内緒にしていることを他人にしゃべらない  | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q7  | どんなに小さくても借りは返す          | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q8  | 冗談を言ったり、からかったりする        | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q9  | 真っ先に自分の成功を知らせる          | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q10 | 友人のプライバシーは尊重する          | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q11 | 話しているときには友人の目を見て話す      | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q12 | 落ち込んでいたら慰める             | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q13 | ガミガミ言ったりしない             | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q14 | 友人の他の人との付き合いに口出ししない     | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q15 | 友人が助けを必要とする場合には自発的に助ける  | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q16 | 一緒の時は相手が気持ちよく過ごせるように努める | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q17 | 友人を信用する                 | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q18 | 誠実に接する                  | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q19 | 病気の時には看病する              | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q20 | 誕生日にはプレゼントする            | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q21 | 政治や宗教の話は避ける             | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q22 | 友人の指導に従う                | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q23 | なるべくスキンシップをたもつ          | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q24 | 自分の予定を知らしておく            | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q25 | 友人にはなるべく良く思われるように振る舞う   | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
| Q26 | 必要な時には友人のために時間を割いてやる    | 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 |
- 1 いつもしている 2 大体している 3 したりしなかったり
- 4 めったにしない 5 全くしない



IX 次の各質問に対して、5全くそうだ、4ややそうだ、3どちらともいえない、2あまりそうではない、1全くそうでない、の五段階の回答のいずれがあなたにあてはまりますか。番号を○で囲んでください。

1	グループの中で一人にいる人を見かけると私はかわいそうになる。	5	4	3	2	1
2	沈み込んでいる不幸な人を見ると、私はつらい気持ちになる。	5	4	3	2	1
3	周りの人たちが神経質そうだと、私まで神経質になってしまう。	5	4	3	2	1
4	友達が問題を抱え困っていると、私まで巻き込まれて感情的になってしまう。	5	4	3	2	1
5	愛を歌った歌の言葉に心を強く動かされることがよくある。	5	4	3	2	1
6	周りの人たちの影響を受けて、私の気分はすぐが変わってしまう。	5	4	3	2	1
7	悪い知らせを人に告げなければならない時、心が動揺して、自分を押さえられなくなる。	5	4	3	2	1
8	私は職業のため訓練する仕事より、ソーシャルワーカーのような福祉の仕事をしたい。	5	4	3	2	1
9	贈り物もらった人がそれを喜んでいる場面を見るのは楽しくて好きだ。	5	4	3	2	1
10	泣いている人を見ると、私は気持ちが動揺して困ってしまう。	5	4	3	2	1
11	友達が動揺、狼狽していても、私は巻き込まれたり動揺することはない。	5	4	3	2	1
12	うれし泣きしている人を見ると、ばかばかしい感じがする。	5	4	3	2	1
13	周りの人たちが悩んだり、苦しんだりしていても、私は平静でいられる。	5	4	3	2	1
14	友達が悩み事を話し出すと、私は話をそらそうとする。	5	4	3	2	1
15	私は周りの人の笑い声に気が引かれてしまうことはない。	5	4	3	2	1
16	歌を歌ったり聞いたりしていると、私は楽しい気分になる。	5	4	3	2	1
17	小説を読んでいると、その主人公の気持ちに引き込まれてしまうことがよくある。	5	4	3	2	1
18	人が冷たくあしらわれているのを見ると、私は大変腹が立つ。	5	4	3	2	1
19	周りの人が沈み込んでいると、私は自分だけ平静でいられなくなってしまう。	5	4	3	2	1
20	私は動物が苦しんでいるのを見るとかわいそうでじっとしていられなくなる。	5	4	3	2	1
21	困っているお年寄りを見ると、胸に痛みを感じる。	5	4	3	2	1
22	映画を見ていると、つい夢中になってしまい、その映画に引き込まれる。	5	4	3	2	1
23	議論している時に相手が自分の考えにどのような気持ちを持っているかまず知りたい。	5	4	3	2	1
24	戦争や殺人の映画を見ていると、心が乱れうろたえてしまう。	5	4	3	2	1
25	直接自分の事でなくても、身近な人が機嫌良くしていると私も愉快になる。	5	4	3	2	1
26	友達が先生に馬鹿にされているのを見ていると、私まで頭に血がのぼってくる。	5	4	3	2	1
27	いつも飢えている人たちが、どんな気持ちで生きているのか想像してみることがある。	5	4	3	2	1
28	他の人の抱えている問題がまるで自分の問題であるかのように感じられることがある。	5	4	3	2	1
29	良い映画を見ていると、自分をすぐその主人公におきかえてしまう。	5	4	3	2	1
30	私は他の人たちよりも、人々の感情や気持ちを理解しようと心がける。	5	4	3	2	1
31	映画を見ながら涙を浮かべたり、泣いている人を見るとおかしと思う。	5	4	3	2	1
32	他人の感情に影響されずに、自分の力で決心することが出来る。	5	4	3	2	1
33	動揺し心を乱している人を見ると、どうしてそんなになるのか理解できない。	5	4	3	2	1
34	本や映画に夢中になってしまうのは、すこしばかばかしいことだと思う。	5	4	3	2	1
35	涙を浮かべている人を見ると、同情するより先にいらだちを感じる。	5	4	3	2	1
36	他人が経験したことに、強く心を動かされたり、深く巻き込まれてしまう。	5	4	3	2	1
37	見知らぬ人を見ると、その人が心の中で考えていることを想像してみる。	5	4	3	2	1
38	人が怪我をしているのを見ると、私まで気持ちが動揺してしまう。	5	4	3	2	1
39	お年寄りを見ると、私がお年寄りだったらどういう気持ちになるか考えてみる。	5	4	3	2	1
40	障害児をみると、その子はどんな気持ちであるのかと考えてみる。	5	4	3	2	1
41	非常に不機嫌そうな人を見ると、私がお年寄りだったらどんな感じをもつか想像してみる。	5	4	3	2	1
42	親のやったことが社会から認められたり賞賛されると自分のことのように思う。	5	4	3	2	1
43	友達がいい仕事に就職したら、他人事でなく嬉しい。	5	4	3	2	1
44	成績の良かった人のことを聞くと、私まで嬉しくなる。	5	4	3	2	1
45	友達が重要な役に選ばれると自分のことのように嬉しい。	5	4	3	2	1
46	人と意見が合わないときには、その人がそうした意見を持つにいたった理由を考える。	5	4	3	2	1
47	友達が婚約したり、結婚したという話を聞くと、自分も幸せな気分になる。	5	4	3	2	1
48	友達が怪我をすると、強く動揺する。	5	4	3	2	1
49	テレビのクイズ番組で多額の賞金を獲得した人を見ると興奮して喜ぶ。	5	4	3	2	1
50	友達が会合でまごまごしていると、自分も落ち着かなくなる。	5	4	3	2	1
51	周りの人が興奮していても、自分が巻き込まれずに平静でいることに気付くことがある。	5	4	3	2	1
52	動物が痛めつけられているのをみても、動揺しない。	5	4	3	2	1
53	嫌いな人が、非難されているのを見ると、心の中で嬉しくなる。	5	4	3	2	1
54	親がお金のことで困っていても、自分は悩んでしまうことはない。	5	4	3	2	1
55	他人が厄介な問題を抱えていたら、巻き込まれないように離れている。	5	4	3	2	1
56	友達が悪い成績を取っても、それはその人の問題で、私には関係ない。	5	4	3	2	1
57	心の中で起きていることは、他人には本当は分からないものだ。	5	4	3	2	1

58	小説中の出来事が自分の身に起こったらどんな気持ちになるか考えることがある。	5	4	3	2	1
59	演劇や映画を見ると、主人公になったような感じがする。	5	4	3	2	1
60	私は見知らぬ人を見ながら、その人の考えを想像してることがある。	5	4	3	2	1
61	わたしはいろいろなタイプの人になった時のことを想像してみるのが好きだ。	5	4	3	2	1
62	友達が言葉に出して言わなくても、その人の考えが正確にわかる。	5	4	3	2	1
63	貧しい人がお金持ちに対してどんな感情を持っているか想像することが出来る。	5	4	3	2	1

X 次の質問に自由に回答してください。

Q1 友人と仲間とは全く同じではない。なぜなら、

Q2 友人とはどんな人のことか？

Q3 親友とはどんな友達か？